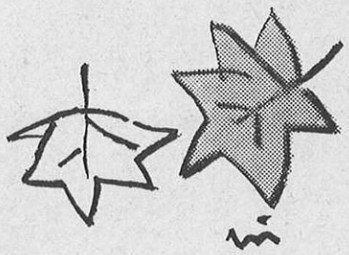
青少年の健全育成はまず家庭から

随想



敬老の日に

藤本伸哉

「こんなにいろいろな物をいただいて、眼が見えないのが残念ですが、ありがたいことです。私はしあわせ者で。」

老媼は手さぐりで贈物をを撫でては手を合せる。最近眼が見えなくなったそうだけれども、耳も遠くないし、声にも張りがあった。何か唄ったらという家人のすすめで、老媼は短い唄をきかせてくれた。敬老の日の前日、総理大臣や知事の祝詞、記念品を届けるために、本年百才になられた老人を訪ねた。人間の寿命が延びた今日ではあるけれども、百才ともなればさすがに天寿を生きておられるという感じをうける。家の人はできるだけ長生きさせるために、宝物を抱いているように世話しておられる様子だった。

慶応二年に生れてこの方百年、この老媼は変転する世の中で多くの経験をへてきた筈である。戦争だけをとってみても、西南の役、日清、日露の戦争、第一次大戦、満洲事変、支那事変から大東亜戦争と、まさに戦争の連続である。更に科学の発達は老媼の生活環境をずい分変化させ、予想さえしなかった世界の進歩に驚いているに違いない。

私たちも今から百年後の世界を予想することは全く困難である。歴史的な事件はもちろんのこと、止まることを知らない自然科学の発達はどんな世界を創造するのであろうか。

ある週刊誌に一九八〇年代の未来像が載っていたが、電子工業の進歩による電子計算機や通信装置が存分に駆使される世界では、医療の発達により人間の寿命は延び、あらゆる生活が電子計算機によって合理的に処理されるという。そして亭主族の生き甲斐を奪うものとして、例えば会社や役所の出張は不要になるし、上司や女房からは昼の勤務状況はもとより、夜どこかで飲んでいても所在が分ってしまうような味気ない沙婆がくるという。百年後はともかく二十年後にして然りとすれば、人間の精神生活も変るであろうが、どんなに科学が発達してもそれを応用するのは人間であり、人間には寿命がある。事故死や病死は無くすることができても老衰は免れないであろう。年一年、老人は多くなり、街や村に溢れてくる。

わが国で第一回の国勢調査が行われた明治二四年から三一年当時の平均寿命は、男四二才、女四四才であり、それに比べるに現在の寿命はずい分延びてきた。七十才、八十才でもかくしゃくたる人もおられるし、福田令寿先生のように九十四才にしてなお第一線で活躍できる方もおられる。しかし多くは年とともによぼよぼしてくるに違いない。

高等学校時代に「失われた地平線」というアメリカ映画を観た。不老長寿の楽園に迷い込んだ男が沙婆に帰り、その話をするが誰も信じてくれず、彼は再びその楽園を求めて山に向う話だが、支那事変が始った頃の騒然たる世間だっただけに、この映画は妙に印象に残った。この種の物語りは、支那の武陵桃源をはじめどこの国にもある。いつの時代も、いずこの国でも人間は桃源の夢を追ってきた。

しかし現実の人間世界は、桃源境どころではなく、自然科学の発達と精神生活のずれは愈々ひどくなり、老人にとっては更に住みにくい世となってきつつある。

「住みにくいと悟ったとき、詩が生れて画ができる。住みにくい所を束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人や画家の使命がある」と草枕の主人公は山路を登りながら考えた。

住みにくいからといって、老人がみんな詩人や画家になるわけにはいかない。

「老人に対する取扱い方いかんが、その国の文明度の物差となる」と言われているが、老人のことが大きな社会問題として漸く世間の関心を高めてきたようだ。

（ふじもとしんや・県民生労働部長）